

動物園人、長生きを考える

小 松 守

(秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長)



この秋、JR秋田駅の駅たびコンシェルジュ企画、「大森山動物園に行こう」があり、そのガイド役を務めた。一人のご婦人から思ってもみなかった質問が投げかけられた。「園長さん、動物園の動物は野生と比べ、幸せで長生きなんですか？」と。平均寿命を超えた長生きという意味ではなく、野生と違い不自由な暮らしの動物園の動物は幸せに、長く生きているのだろうかという単純なご心配だったように受け止めた。

即座の回答に窮し、ひとまず「難しいですね」とかわしながらも、動物園人として「わかりません」とは言えないから、「野生に生きる動物の寿命は不明なことが多く、また、野生と動物園では生態や暮らし方が大きく異なり、長い場合も短い場合もあり一概には言えませんね。でも、経験的に私は動物園の方が長生きだと思いますよ」と、どこか煙に巻くような答えになった。ご婦人は「動物園の動物の長生きは飼育員さんの懸命なお世話があるからなのでしょうね」と反応してくれた。

さらに「動物園では野生と違い確実に餌をもらえるし、敵から襲われることもありません。食と安全の保障に加え、寝小屋もあり気象変化からも守られていますし」と続けた。ご婦人は「なるほどね」と頷いてくれた。同行者もいたため、ご婦人との短い「長生き」談義は一区切りとなった。

動物と長く向き合い、動物が少しでも健康で幸せに暮らせるように努めてきたつもりだったが、「長生き」の視点で動物を見ることがあまり

なかった。直球的質問に動物園人の心はどこかざわめき、戸惑い、一方で新鮮さを覚えた。

現代の高齢化社会にあって、「長生き」は日常的に登場する言葉だが、動物世界で「長生き」とか「幸せ」を掘り下げて考えるのは、人の思いも重なりなかなか手強いテーマである。

「長生き」と「幸せに生きる」は似ているところがあるが、ここでは「長生き」に焦点をあて、動物を人に飼育され生きる動物と、野生に生きる動物と、大きく二つに区分しながら考えることにした。

飼育動物の代表は家畜（鶏を含む）で世界の飼育数は300億頭を超える。経済動物ゆえにコスト削減が最優先され、生産性の効率上、一定の飼育期間後には処分されてしまうから、悲しいかな家畜は長生きできない宿命にある。

同じ飼育動物でも人の愛情を受け、人と共に暮らす犬や猫などは家畜と全く違う。ペットとか伴侶動物と呼ばれ、人の思いで寿命を全うし長生きするものが多い。サイズなど飼育しやすい要因だけでなく、何よりも飼い主の思いや愛情を受け、手厚いケアの下で生きる動物である。

それでは本題の動物園動物はどうだろう。公的存在である動物園の飼育は、自然や動物に抱く社会意識を背景に、教育的展示、動物の希少性、飼育コスト、飼育者の動物との関係性など、独特の思いの中で行われている。同時に野生を失っていない動物の飼育は、家畜やペットとは異なる難しさと限界も抱えている。だが、動物園での生活条件は、組織的なケアでもあり、前



述のように野生に比較し安定しているから、多くは長生きしやすいのだろう。

例えば、サルの仲間、チンパンジーの平均寿命のある調査によれば野生で約13歳、動物園では約30歳だった。大森山で暮らすチンパンジーの雄、ボンタ君は50歳を過ぎる今でも元気潑刺だ。あるいは、猛獣類のオオカミやトラなども野生に比べ長生きする動物と言えそうだ。犬や猫に近いなど豊富な飼育知見や獣医療情報が活かされている。最近亡くなった大森山のシンリンオオカミのシン君はほぼ最高寿命の17歳まで生きた。

一方、長生きが難しい動物もないわけではない。例えば体格の巨大さ、強い群の絆を持つアフリカゾウは野生では無敵な存在、長生きの条件が整っている。野生でのあるデータでは平均的寿命は約35歳、密猟死亡を加えない場合は約50歳にもなる。ところが、世界の動物園約4,500頭の飼育データでは平均的寿命は約17歳と短い。ちなみに大森山動物園で昨年亡くなったアフリカゾウの雄「だいすけ」は32歳だったから、それなりに生きたとも言える。動物園ゾウの長生きが難しい理由の一つは、世界中の動物園の多くは施設の性格上、ゾウのサイズに見合った飼育場の広さを用意できないことかもしれない。

一方、対極にある野生での暮らしをイメージしてみると、例えば野生のサルは豊かな森でのびのび自由に暮らす様子を思い浮かべるが、それは高度な運動能力などが十分機能しているからだ。高齢化で機能低下が生じると森という三次元空間での暮らしはやがて難しくなる。強いトラやオオカミでも同じだ。身も心も健康で強い力があるから狩りができるが、高齢になり弱れば難しくなる。強い動物の長生きは自ら強さを維持し続けなければならないということなのだ。

野生動物は種の命をつなぎ続けるために、弱

い立場の子を守る子育てを編み出した。自然は次世代を担う弱い子は守ろうとするが、生産年齢を終え高齢になり弱ってゆく存在に対してはどこか冷徹だ。悲しいが、一定の役割を終えた動物は巡る生命の大循環に飲み込まれ、他を生かす側に回されてゆく。自然の摂理だ。

だが、長生きに意味を持たせようとしたのも自然である。動物はより生きやすくするため群れ、社会をつくった。生き方はしだいに複雑さと難しさが増す。食物や水のありか、危険を回避する方法などは長く生きた経験が大いに役立った。類人猿やゾウなど、群れ社会で高度な社会生活をする動物は長く生きたものに導かれ、まねて生きる。群れの子育てでは育児経験の豊かな高齢雌が子の面倒をみるなど群れへの寄与もする。大森山動物園で飼育する南米産のノドジロオマキザル家族にいた高齢雌が自身の娘の子、すなわち孫をおぶって子守する様子を以前何度も見た。娘と家族を助け、群れを助けているようにも思えた。社会の成熟は多様な存在を必要とする。自然（群れ）は経験豊かな存在、長生きした者に意味を持たせたのか。

飼育と野生の動物、それぞれの立場で断片的に「長生き」を考えてみたが、やはり奥深かった。前者は人（動物園）それぞれが抱く思いや考えの下、動物に備わった寿命を人の支えもあり成り立たせている「長生き」であり、人が中心にいる。一方、後者は子を残すという宿命を果すことにエネルギーを費やすから、それを終えると残りの命は他を生かす側に回り、自然の大循環に入り消えて行く。決めるのは自然だ。同じ「長生き」でも、立ち位置が違えば意味が異なるように思う。ただ、長生きする側の立場を抜きにして考えたためか、その意味がどこか薄っぺらなものになってしまった。ご婦人の言葉「幸せに生きる」には重い意味があったのだ。